

Analog Sound Digital Recall



www.WesAudio.com



ngOmniBox

ユーザーマニュアル

Copyright 2026 by WesAudio

ngOmniBoxをお買い上げいただき、ありがとうございます。
デジタルリコール対応 次世代アナログ ミックス&マスタリング プロセッサー

Radoslaw Wesolowski and Michal Weglicki

次世代アナログ ミックス&マスタリング デジタルリコール対応プロセッサ

長年にわたり、エンジニアは厳選されたアナログプロセッサを組み合わせ、EQ、コンプレッション、サチュレーション、クリッピング、ステレオエンハンスメントを使い最終的なサウンドを作り上げ、ミックス・マスタリングチェーンを構築してきました。

ngOmniBox は、そのワークフロー全てを一台のデジタルリコール対応のアナログプロセッサに集約しました。

柔軟なステレオ・シグナルパスを中心に設計されたngOmniBoxは、パッシブEQ、バスコンプレッサー、サチュレーション、クリッパー、ステレオ WIDTH プロセッシングに加え、入出力ステージと外部インサート・ポイントを搭載しています。

各プロセッシングブロックは個別に ON/OFF（バイパス）の切り替えが可能で、

実際のミックスで求められるサウンドに合わせてシグナルチェーンを構築できます。

EQとコンプレッサーの順序も入れ替え可能。異なる 2つのプロセッシング・アプローチに瞬時にアクセスできます。

フルデジタルコントロール、A/B/C 比較、LCD による詳細なパラメーター表示、DAW プラグインとのシームレスな連携により、完全なアナログ・シグナルパスを維持しながら、現代的なワークフローならではのスピードと精度を実現します。

1台に集約された、あなただけのアナログ・フィニッシングチェーン。すべての設定をリコール可能。



目次

1 主な特長	7
2 ハードウェア	9
2.1 仕様	9
2.2 フロントパネルと主な機能	10
2.3 リアパネル	13
2.4 オーディオ信号の接続	15
2.5 電圧セクターとヒューズ	15
2.5.1 電圧セクター	15
2.5.2 予備ヒューズ	16
2.5.3 ヒューズの交換	16
2.5.3.1 ヒューズホルダーを開く	16
2.5.3.2 ヒューズを交換する	17
3 アナログプロセッシング	18
3.1 アナログ信号の流れ	18
3.2 アナログプロセッシングブロック	19
3.2.1 入力メーター	19
3.2.2 入力トリム	19
3.2.3 入力インサート	19
3.2.4 入力HPF	20
3.2.5 パッシブEQセクション	20
3.2.6 バスコンプレッサー	21
3.2.7 サチュレーション	21
3.2.8 クリッパー	22
3.2.9 ステレオWIDTH	23
3.2.10 出力インサート	23
3.2.11 出力トリム	24
3.2.12 出力VUメーター	24
3.2.13 バイパス	24

4	ソフトウェアのセットアップ	25
4.1	インストール手順	25
4.1.1	Windowsをお使いの場合	25
4.1.2	macOSをお使いの場合	25
4.1.3	トラブルシューティング	26
4.2	GCon Manager	26
4.3	ファームウェアのバージョン確認	28
4.4	ファームウェアの更新	29
4.5	GCon接続の設定	30
4.5.1	USB	31
4.5.2	Ethernet	32
4.5.3	DHCPによる初期ネットワーク設定	33
4.5.4	DHCPの有効化と無効化	34
4.5.5	固定IPアドレスの設定	35
4.5.6	直接接続 PC/MacのIPアドレス設定	36
5	デジタル制御とリコール	38
5.1	DAWプラグイン	39
5.1.1	ngOmniBox プラグイン管理パネル	40
5.1.2	ngOmniBox プラグインの基本構成	43
5.1.3	ngOmniBoxプラグイン 入出力セクション	44
5.1.4	ngOmniBoxプラグイン EQとバスコンプレッサー	45
5.1.5	ngOmniBoxプラグイン サチュレーション/クリッパー/WIDTH	47
6	その他の機能	48
6.1	内部メモリーの管理	48
6.1.1	クイックプリセットA/B/C	48
6.1.2	内部プリセット	48
6.1.3	コンフィギュレーションバンク	49
7	トラブルシューティング	50
8	略語と用語	51

1 主な特長

- 完全アナログのステレオ ミックス&マスタリング プロセッサー：ミックスバスとマスタリング向けに、複数のアナログプロセッシングステージを1台に集約しています。
- 柔軟なプロセッシング構成：各プロセッシングブロックを個別にオン／バイパスでき、ミキシングやマスタリングのワークフローに合わせてシグナルチェーンを柔軟に構成できます。
- 充実した入力セクション：ステレオ入力レベルの調整、ハイパスフィルター、入力レベルメーターにより、処理前の信号を正確に整えられます。
- 入力インサート：外部アナログプロセッサーをngOmniBoxのシグナルチェーンへ直接組み込みます。
- 完全アナログのパッシブEQ：音楽的なパッシブEQで、広い帯域の音色調整と全体の周波数バランスの精密な制御が可能です。
- EQとコンプレッサーの柔軟なルーティング：EQをコンプレッサーの前または後に配置し、EQ → COMP／COMP → EQ を即座に切り替えられます。
- アナログ ステレオ バスコンプレッサー：ダイナミクスを制御し、ミックスバスの一体感と最終的な音作りを実現。ほかのプロセッシングチェーンとは独立してバイパスできます。
- アナログサチュレーション：EQとコンプレッサーから独立して、倍音の質感、密度、色付けを調整できます。
- アナログクリッパー内蔵：ピークコントロール、トランジェントの調整、ラウドネスの向上に対応し、個別にバイパスできます。
- ステレオWIDTH：ステレオイメージを精密に制御し、ミックスの聴感上の広がりを独立して調整できます。
- 充実した出力セクション：ステレオ出力レベルの調整と出力メーターにより、最終段のゲインを正確に設定できます。
- 出力インサート：ngOmniBoxのプロセッシングチェーンの最終段に外部アナログプロセッサーを組み込みます。
- 出力インサートのStereo／Mid／Sideモード：外部ハードウェアを組み込む際に、ステレオまたはM/S動作を選べます。
- フルデジタルリコール：アナログ信号経路を維持したまま、複雑なハードウェア設定をデジタルで即座にリコールできます。
- ハードウェアA/B/Cメモリー：本体から3つの設定をすばやく切り替え、簡単に比較できます。

- LCDパラメーターディスプレイ：パラメーター値、設定、メーターをフロントパネルで明確に確認できます。
- USBとEthernet接続：USBによる直接接続とEthernetによるネットワーク接続に対応し、さまざまな設置環境に適応します。
- アナログオートメーション：DAWにオートメーションを描いてアナログデバイスのパラメーターを時間軸に沿って制御できます。タッチセンサー付きエンコーダーで操作をDAWへ記録することも可能です。

2 ハードウェア

本章では、ngOmniBoxのハードウェアの特長を説明します。

2.1 仕様

THD+N (1 kHz、0 dBu、全セクションOFF)	<0.003%
THD+N (1 kHz、0 dBu、全セクションIN)	<0.015%
周波数特性	10 Hz – 40 kHz (–1 dB)
入力インピーダンス	>10 kΩ
出力インピーダンス	<50 Ω
クロストーク	>100 dB
最大入力レベル	+26 dBu
最大出力レベル	+26 dBu
最大消費電力	22 W
コンプレッサー アタック FAST	0.1 ms
コンプレッサー アタック SLOW	30 ms
コンプレッサー リリース FAST	100 ms
コンプレッサー リリース MID	0.6 s
コンプレッサー リリース SLOW	1.2 s
コンプレッサー リリース AUTO	2つの時定数による自動リリース
コンプレッサー レシオ LOW	1.5:1
コンプレッサー レシオ HIGH	10:1
サイドチェインHPF	60 Hz / 90 Hz / 150 Hz
入力インサート	電子バランス方式 INPUT TRIMの後、HPFの前
出力インサート	電子バランス方式 STEREO/M/S切り替え可能 OUTPUT TRIMの前
本体寸法	88 × 483 × 235 mm
梱包寸法	550 × 380 × 270 mm
本体重量	4.4 kg
梱包重量	7 kg

2.2 フロントパネルと主な機能

Analog Sound
Digital Recall



 **WESAUDIO**

1. 入力セクション：ngOmniBoxの処理チェーンに入る信号を制御します。TRIMでステレオ入力レベルを調整し、LEDメーターで左右の入力レベルを確認できます。

内蔵HPFにより、後段の処理前に不要な低域成分をカットできます。TRIMの後、HPFの前に配置されたバランス入力インサートにより、外部のアナログプロセッサを信号経路へ直接組み込みます。

2. パッシブEQ：広い帯域を音楽的に整える完全アナログのパッシブEQです。LFとHFそれぞれのコントロールで、低域・高域の周波数とゲインを独立して調整できます。

INスイッチでEQを有効化またはバイパスします。FLIPでEQとバスコンプレッサの順序を切り替えます。

- ・ EQ → COMP：EQの後にバスコンプレッサで処理します。
- ・ COMP → EQ：バスコンプレッサの後にEQで処理します。

3. バスコンプレッサ：アナログ・ステレオのバスコンプレッサで、ダイナミクス・コントロール、ミックスバスの「グルー」効果、最終的なミックスの質感作りを担います。

THRESHOLDはコンプレッションが始まるレベルを決定し、MIXはドライ信号とウェット信号をブレンドしてパラレル・コンプレッションを行います。MAKE UPはコンプレッション後の出力ゲインを補正します。アタック、リリース、レシオ、サイドチェイン・フィルターの各設定は、専用コントロールで選択できます。LEDゲイン・リダクション・メーターには、コンプレッション量が表示されます。

INスイッチでバスコンプレッサをオン/バイパスします。

4. サチュレーション：EQやコンプレッサとは独立して、アナログサチュレーションと倍音による質感を調整できます。クラシックなテープサチュレーションを思わせる特性で、信号を強くドライブするほど密度感、温かみ、倍音が徐々に加わります。

DRIVEを高くすると、控えめな色付けから明瞭なサチュレーションや歪みへと変化し、穏やかなエンハンスにも積極的な創作的処理にも使用できます。DRIVEでサチュレーションの量を設定し、MIXでドライ信号と処理後の信号を混ぜることで、効果を徐々に加えることも、積極的に効かせることもできます。INスイッチでサチュレーションのオン/バイパスの切り替えができます。

5. クリッパー：処理チェーンの最終段でピークコントロール、トランジェントを調整してラウドネスを高めるアナログクリッパーです。

CLIPでクリッピング量を調整し、LEDメーターで動作状況を視覚的に確認できます。INスイッチでクリッパーのオン/バイパスを切り替えられます。

6. ステレオWIDTH：処理後の信号のステレオイメージをコントロールします。WIDTHでステレオWIDTH（Side信号の量）を調整します。HPFは、Side信号全体に適用するハイパスフィルターのカットオフ周波数を設定します。

7. INスイッチでWIDTHセクションのオン/バイパスを切り替えます。

8. 出力セクション：ngOmniBoxから出力される最終的な信号をコントロールします。TRIMでステレオ出力レベルを精密に調整し、LEDメーターで左右の出力レベルを確認できます。出力インサートにより、シグナルチェーンの最終段へ外部アナログプロセッサを組み込みます。INSERT M/Sは、出力インサートを通常のステレオ動作とMid/Side動作の間で切り替えます。

9. BYPASS ALL：ngOmniBoxのプロセッシングチェーンをバイパスし、処理後の信号と未処理の信号を直接比較できます。

10. LCDディスプレイ：入出力メーター、パラメーター値、現在の設定など、本体の動作状況を明確に表示します。フロントパネルで変更したパラメーターが画面に直接反映され、精密な調整と確認ができます。

11. A/B/Cメモリー：3つの専用ボタンで、異なるngOmniBoxの設定を瞬時に切り替えます。完全なアナログ信号経路を維持しながら、本体から異なるセッティングをすばやく比較できます。

2.3 リアパネル

Analog Sound Digital Recall



1. AC電源ソケット：電源ケーブルを接続する端子で、本機を商用電源に接続します。動作に必要な交流電源（AC）をここから取り込みます。地域の電気規格に適した電源コードを使用できる設計で、安全かつ効率的に電源を供給します。

2. 電圧セクター：地域の電気規格に合わせて、動作電圧を115 V（60 Hz）または230V（50 Hz）に切り替えられます。損傷を防ぐため、選んだ電圧に適したヒューズを必ず使用してください。使用地域の電源に合わせて電圧セクターを変更する前に、適切なヒューズへ交換してください。これにより、安全性と性能の仕様内で動作します。

3. シリアルナンバー

デジタル管理用接続：ngOmniBoxは、次の2種類の接続でデジタル管理を行えます。

4. USB：GCon管理用のUSB 2+ 互換ポート

5. Ethernet：UDPプロトコルによるGCon管理用 Ethernet ポート（単一サブネット内のLAN）

同時に使用できる接続は1種類だけです。Ethernetを使用する場合は、本体背面のUSBケーブルを抜いてください。

6. 出力インサート：左右それぞれに独立したバランスSEND／RETURN端子を備え、シグナルチェーンの最終段へ外部のアナログプロセッサを組み込みます。StereoまたはMid/Sideモードで動作します。

7. 右チャンネル入出力：ステレオ信号の右チャンネル用バランスXLR入力・出力端子です。

8. 入力インサート：左右それぞれに独立したバランスSEND／RETURN端子を備え、ngOmniBoxの信号経路へ外部のアナログプロセッサを組み込みます。

9. 左チャンネル入出力：ステレオ信号の左チャンネル用バランスXLR入力・出力端子です。

2.4 オーディオ信号の接続

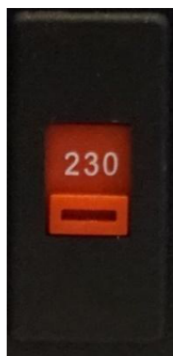
ngOmniBoxは、アナログ回路ならではの温かみと豊かさに、デジタルコントロールの精度と柔軟性と組み合わせたデバイスです。オーディオの信号経路は完全なアナログで、背面のXLR端子を通じてクリアなオーディオを伝送します。一方、本機の多彩な機能やパラメーターは、デジタル管理プロトコルで精密に調整できます。各チャンネルの入力・出力にXLRソケットを使用し、干渉のない高品位なオーディオ伝送を実現します。

2.5 電圧セクターとヒューズ

2.5.1 電圧セクター

電圧セクターの変更やヒューズ交換の前に、本体の電源を切り、電源コードを商用電源から抜いてください。電源を入れる前に、選択した電圧に適した定格のヒューズが取り付けられていることを確認してください。

ngOmniBoxは230 Vまたは115 Vで動作するように設定できます。本体は販売地域に合わせて、電圧と適切なヒューズを設定して出荷されます。電圧セクターで設定を変更する場合は、変更後の電圧に適したヒューズも必ず使用してください。



正しく動作させるため、選択した電圧に適したヒューズを取り付けてください。使用する定格は以下のとおりです。

- 115 V : 630 mA ヒューズ
- 230 V : 315 mA ヒューズ

重要：電圧セクターの設定を誤ると、機器に重大な損傷が生じ、ヒューズが切れるおそれがあります。たとえば115 V (60 Hz) 設定のまま230 V (50 Hz) 電源に接続すると、過負荷によってヒューズが切れ、本体が損傷する可能性があります。電源を入れる前に、電圧セクターの設定を必ず再確認してください。

2.5.2 予備ヒューズ



電源部には予備ヒューズが付属しており、必要に応じて使用中のヒューズとすばやく交換できます。

2.5.3 ヒューズの交換

ヒューズが切れた場合は、以下の手順で安全に取り出して交換してください。重要：作業前に必ず本体の電源を切り、電源コードを電源から抜いてください。

2.5.3.1 ヒューズホルダーを開く

ヒューズホルダーを開くには、小型のマイナスドライバーを使用します。

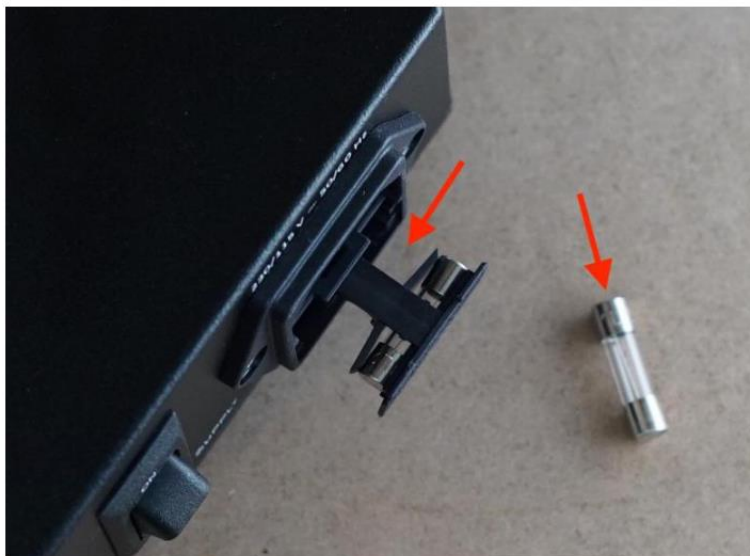
1. ドライバーをヒューズホルダーの溝に差し込みます。
2. 下図のように、ホルダーを静かに引き出します。



2.5.3.2 ヒューズを交換する

ヒューズホルダーを開いたら、次の手順で交換します。

下図のように、切れたヒューズ（印で示されたもの）を静かに押し、ホルダーから外れて落ちるまで押して取り外します。



隣のスロットにある予備ヒューズを取り出し、取り外したヒューズの位置に差し込みます。

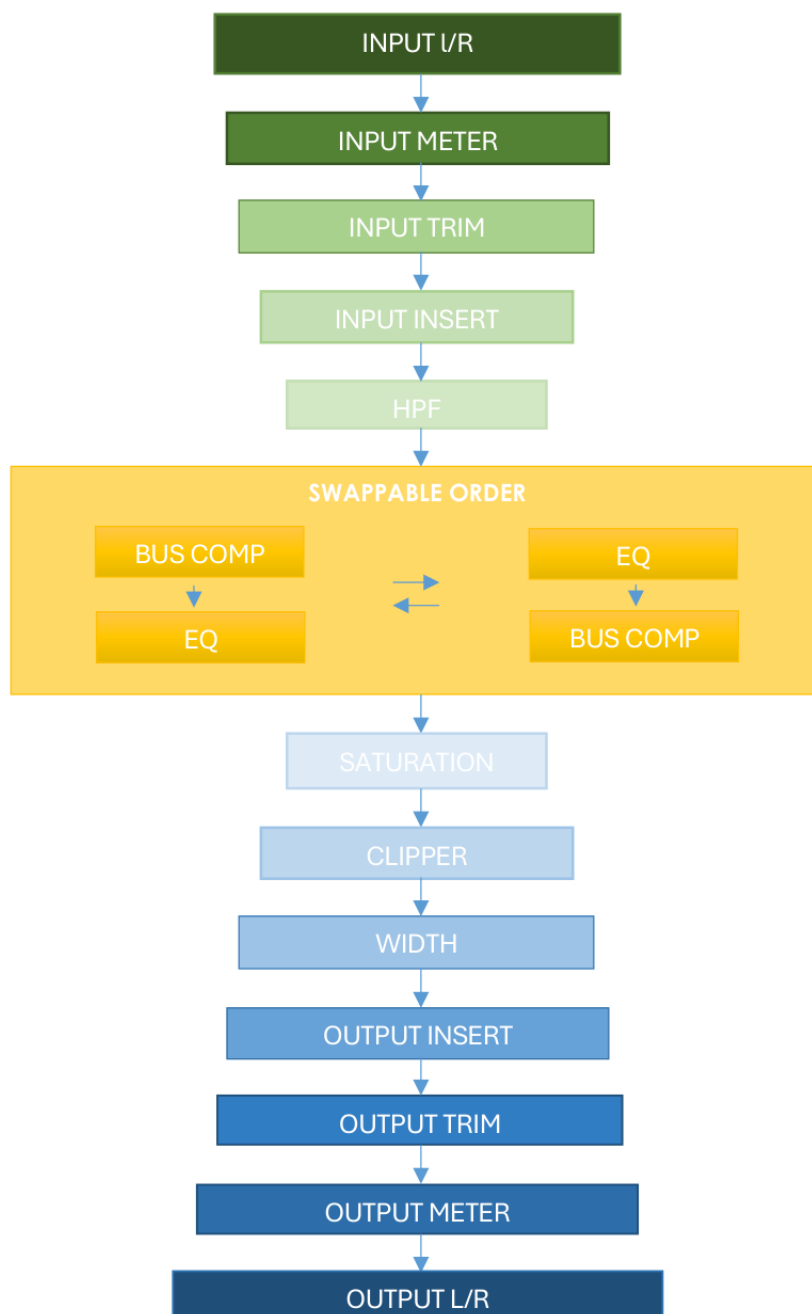


ヒューズホルダーを確実に閉じます。
これで本体を使用できます。

3 アナログプロセッシング

本章では、ngOmniBoxのアナログ動作を詳しく説明します。

3.1 アナログ信号の流れ



重要な注意事項

ngOmniBoxは完全なアナログ・デバイスです。一体化された設計のため、一部の機能は互いに影響します。詳細は後の章で説明しますが、本機内で各機能がどのように相互作用するかについての主なポイントを以下に示します。

- バイパス：BYPASS ALLを有効にするとINPUTとOUTPUTが直接接続され、シグナルチェーン内のほかの機能は動作しなくなります。たとえば、バイパス中はインサートも使用できません。

3.2 アナログプロセッシングブロック

ngOmniBoxは、ミックスバスとマスタリング向けのスペシャルなアナログプロセッシングブロックを備えています。

各セクションを個別にオンまたはバイパスし、さまざまなミックスやマスタリングの要件に合わせてプロセッシングチェーンを構成できます。主なプロセッシングブロックは、パッシブEQ、バスコンプレッサー、サチュレーション、クリッパー、ステレオWIDTHです。信号処理は完全なアナログのまま、パラメーターのデジタルコントロール、リコール、オートメーションが可能です。

3.2.1 入力メーター

INPUTメーターは、本体へ入る信号レベルを表示します。-6 dBu〜+24 dBuの30 dB範囲をカバーし、処理前の入力レベルを確認できます。

3.2.2 入力トリム

INPUT TRIMは、ngOmniBoxのプロセッシングチェーンへ入る信号のレベルを調整します。

ゲイン範囲は±15 dB、調整単位は0.25 dBです。後段の処理前に入力レベルを正確に合わせることができます。

3.2.3 入力インサート

ステレオ入力インサートにより、外部のアナログプロセッサーをngOmniBoxの信号経路へ組み込みます。

左右それぞれに独立したSEND/RETURN端子があり、本体のメイン入出力接続を変更せずに、外部のステレオデバイスを組み込みます。

ngOmniBoxをセットアップの中心として維持しながら、追加のアナログハードウェアでプロセッシングチェーンを拡張できます。

入力インサートは、メインのプロセッシングブロックから独立して制御できます。必要なときに、接続した外部プロセッサをアナログチェーン全体へ組み込みます。

3.2.4 入力 HPF

入力HPFは、ngOmniBoxのプロセッシングチェーンの先頭で低域をフィルタリングします。12 Hz～200 Hzを連続可変で調整でき、スロープは12 dB/octです。メインのプロセッシングセクションへ入る前に、不要なサブソニック成分、ランブル、過剰な低域成分を低減できます。

信号経路の早い段階に配置されているため、不要な低域成分がEQ、バスコンプレッサー、それ以降のプロセッシングに影響するのを防ぐ目的にも使えます。

3.2.5 パッシブ EQ セクション

ngOmniBoxは、広い帯域を音楽的にトーンシェイピングするために設計された、完全アナログのパッシブEQを搭載しています。一般的なベル型のバンドではなく、低域（LF）と高域（HF）の2つのシェルビングバンドで構成されています。

各バンドに独立したGAINとFREQUENCYがあり、低域・高域それぞれのターンオーバー周波数とブースト／カット量を調整できます。

GAINは±15 dBの範囲を0.25 dB単位で調整でき、微妙な音色補正から積極的なイコライジングまで対応します。

FREQUENCYでは、各バンドで以下の8つの周波数ポイントから選択できます。

- LF : 33 Hz、60 Hz、100 Hz、150 Hz、220 Hz、300 Hz、410 Hz、500 Hz
- HF : 1.8 kHz、2.8 kHz、4.1 kHz、6 kHz、8.2 kHz、13 kHz、18 kHz、28 kHz

INスイッチでEQセクション全体をオンまたはバイパスします。

FLIPで、パッシブEQとバスコンプレッサーの順序を入れ替えることができます。

- EQ → COMP : EQで処理してからバスコンプレッサーへ送ります。
- COMP → EQ : コンプレッションしてからEQで処理できます。

この2つの順序を変えることで、より柔軟な処理が可能になります。コンプレッションの前にEQ処理を行うと、コンプレッサーの反応に影響し、コンプレッションの後にEQを処理すると、コンプレッションされた信号に対してトーン・シェイピングができます。

3.2.6 バスコンプレッサー

ngOmniBoxは、ダイナミクス・コントロール、ミックスバスの「グルー」効果、最終的なミックスの質感づくりのために設計された、完全アナログのステレオ・バスコンプレッサーを搭載しています。設定に応じて、控えめなレベルコントロールにも強いコンプレッションにも使用できます。

コンプレッサーには、主要なダイナミクスパラメーターの専用コントロールがあります。

- **THRESHOLD** : コンプレッションが始まる信号レベルを設定します。
- **ATTACK** : 信号がスレッシュホールドを超えた後の反応速度を設定します。
FAST : 0.1 ms、SLOW : 30 msの2種類です。
- **RELEASE** : 信号がスレッシュホールドを下回った後、コンプレッション前の状態へ戻る速度を設定します。
FAST : 100 ms、MID : 0.6 s、SLOW : 1.2 s、AUTO : 2つの時定数によるオートリリースの4種類です。
- **RATIO** : スレッシュホールドを超えた信号のコンプレッション・レシオです。
LOW : 1.5:1、HIGH : 10:1の2種類です。
- **MAKE UP** : コンプレッションによって下がったレベルを補正し、コンプレッサーの出力レベルを調整します。
- **SC FILTER** : サイドチェインへ送る信号を変化させ、低域成分への反応をコントロールします。
- **MIX** : コンプレッション信号とドライ信号をブレンドして、本体内でパラレルコンプレッションを行います。

MIXコントロールを使うことで、元の信号を残しながらコンプレッション信号の密度感を加えられます。外部でパラレル・ルーティングを組まずに、コンプレッションの効果を徐々に加えられます。

内蔵ゲインリダクションメーターは、適用中のゲインリダクション量をリアルタイムで表示します。スレッシュホールド、レシオ、アタック、リリースの調整中に、コンプレッサーの動作を確認できます。

INスイッチでバスコンプレッサー全体を独立してオンまたはバイパスします。

FLIPで、バスコンプレッサーとパッシブEQの順序も入れ替えることができます。選択したルーティングに応じて、コンプレッサーを元の信号またはEQ処理後の信号に反応させるかを選べます。

3.2.7 サチュレーション

アナログサチュレーションは、EQとバスコンプレッサーから独立して、信号に倍音や密度感、質感を加えます。

アナログテープのサチュレーションの特性にインスパイアされています。レベルを上げるにつれて倍音が徐々に加わり、ピークが丸くなり密度と温かみが増します。低い設定では控えめな色付けとして使えます。DRIVEを高くすると、回路が徐々に明瞭なサチュレーションと、はっきり聴き取れる倍音歪みを生み出します。

サチュレーション効果を直接調整するコントロールは2つです。

● DRIVE：サチュレーション回路へ信号をどれだけ強く入力するかを設定し、サチュレーションの全体量と強さをコントロールします。

● MIX：元のドライ信号とサチュレーション処理後の信号をブレンドします。

DRIVEコントロールは、わずかな倍音のエンハンスから明瞭なサチュレーションや歪みまで、量を徐々に調整できます。マスタリングでの穏やかな色付けにも、大胆な処理にも役立ちます。

MIXコントロールにより、処理後の信号を元の信号へブレンドする自由度が高まります。ドライ信号のダイナミクス、トランジェント、明瞭さを保ちながら、サチュレーション・ステージが生み出す倍音の質感と密度感を加えられます。

DRIVEとMIXを組み合わせることで、効果全体の強さと質感を精密にコントロールし、素材や処理の要件に合わせてサチュレーションを調整できます。

このセクションはEQやコンプレッサーから独立して動作し、INスイッチでオンまたはバイパスできます。

3.2.8 クリッパー

アナログクリッパーは、ピーク・コントロール、トランジェントの調整、ラウドネスの向上のための専用ステージです。処理後の信号のダイナミクスをさらにコントロールできます。

CLIPコントロールでクリッピング量を設定します。設定を上げるほど多くの信号ピークにクリッピングが作用し、出力セクションへ到達する前にトランジェントのピークをコントロールできます。

強いトランジェントのピークを含む素材や、コンプレッションだけに頼らずにレベルを上げたい場合に役立ちます。

内蔵LEDメーターはクリッピングの動作を即座に表示します。CLIPコントロールの調整中に、回路が信号ほどの程度強く作用しているかを確認できます。

独立したプロセッシングステージとして単独で使うことも、コンプレッションやサチュレーションと組み合わせてアナログプロセッシングチェーンを構成することもできます。

INスイッチでクリッパーをオンまたはバイパスします。

3.2.9 ステレオ WIDTH

WIDTHセクションは、ステレオイメージをコントロールするステージで、処理後の信号の聴感上の広がり、フロントパネルから直接調整できます。

このセクションの動作は2つのコントロールで設定します。

- WIDTH : 信号のステレオWIDTH を調整します。
- HPF : Width処理から除外する低域の範囲を設定します。

WIDTHにより、ミックスの要件に合わせてステレオイメージを調整できます。定位を引き締めることも、全体の広がりを増すこともできます。

専用HPFで、WIDTH処理 (Side) が作用する周波数範囲をさらにコントロールできます。Side信号から低域成分を除くことで、低域をセンターへ集中させながら、選択した周波数より上の帯域にステレオエンハンスを加えることができます。

低域の安定性に不要な影響を与えずにステレオイメージを広げたい、ミックスバスやマスタリングで特に役立ちます。

INスイッチでWIDTHセクション全体をオンまたはバイパスします。

3.2.10 出力インサート

ステレオ出力インサートは、ngOmniBoxのシグナルチェーンの最終段、OUTPUT TRIMの直前に外部のアナログプロセッサを組み込むための接続ポイントです。

左右それぞれに独立したバランスSEND/RETURN端子があります。本体のメイン入出力接続を変えずに、主要なプロセッシングステージの後後段に外部のアナログ機器を配置できます。

出力インサートは、StereoまたはMid/Sideモードで動作します。

- Stereo : LEFT SEND/RETURNは左チャンネル、RIGHT SEND/RETURNは右チャンネルの信号を扱います。
- Mid/Side : 本体内で、出力インサートの前にステレオ信号をM/Sへエンコードし、リターン後にステレオヘデコードします。LEFT SEND/RETURNはMid信号、RIGHT SEND/RETURNはSide信号を扱います。

動作モードは、フロントパネルの出力セクションにあるINSERT M/Sボタンで選択します。

3.2.11 出力トリム

OUTPUT TRIMは、ngOmniBoxの最終的な出力レベルを調整します。

ゲイン範囲は±15 dB、調整単位は0.25 dBです。後段の機器に合わせて出力レベルを正確に調整できます。

3.2.12 出力 VU メーター

OUTPUTメーターは、本体から出る最終信号のレベルを表示します。

-6 dBu～+24 dBuの30 dB範囲をカバーし、処理後の出力レベルを確認できます。

3.2.13 バイパス

BYPASS ALLにより、全ての処理を適用した信号と未処理の信号を簡単に比較できます。

各セクションを個別にバイパスする代わりに、ngOmniBoxのプロセッシングチェーン全体を一括でバイパスします。処理前後をすばやく比較し、本体全体で加えた処理の総合的な効果を確認できます。

複数のプロセッシングセクションを同時に使用する場合に特に便利です。個々のブロックの設定やバイパス状態を変えずに、チェーン全体の効果を確認できます。

BYPASS ALLを解除すると、以前に選択していたセッティングに戻り、調整と比較が続けられます。

4. ソフトウェアのセットアップ

対象のハードウェアを購入された方は、WesAudioソフトウェアパッケージを <https://www.wesaudio.com/download> からダウンロードできます。

<https://www.wesaudio.com/download>



対応するプラグイン形式とプラットフォームは、上記リンクで確認してください。

4.1 インストール手順

<http://www.wesaudio.com/download> にアクセスし、最新のWesAudioソフトウェアをダウンロードしてインストールを開始します。

4.1.1 Windows をお使いの場合

- 初回インストール：開始前に、すべてのWesAudio機器をコンピューターから外してください。
- USBドライバーのインストール：ドライバーをインストールすると、すべてのWesAudio機器を接続するよう通知されます。指示に従って接続してください。
- コンピューターの再起動：USBドライバーのインストール時に再起動を求められる場合があります。手間はかかりますが、正常にインストールするために重要な手順です。
- 再起動後：インストーラーは自動的に再開するはずですが、再開しない場合は、同じインストーラーを手動で開き、処理を続けてください。

4.1.2 macOS をお使いの場合

macOSのインストーラーを開始する前に、すべてのWesAudio機器を接続してください。macOSがインストーラーをブロックした場合は、WesAudio公式サイトからダウンロードしたことを確認してください。選択可能な場合は「System Settings > Privacy & Security」で「Open Anyway」を選び、画面の指示に従います。「damaged」または「containing malware」と表示された場合は、先へ進む前にサポートへお問い合わせください。

4.1.3 トラブルシューティング

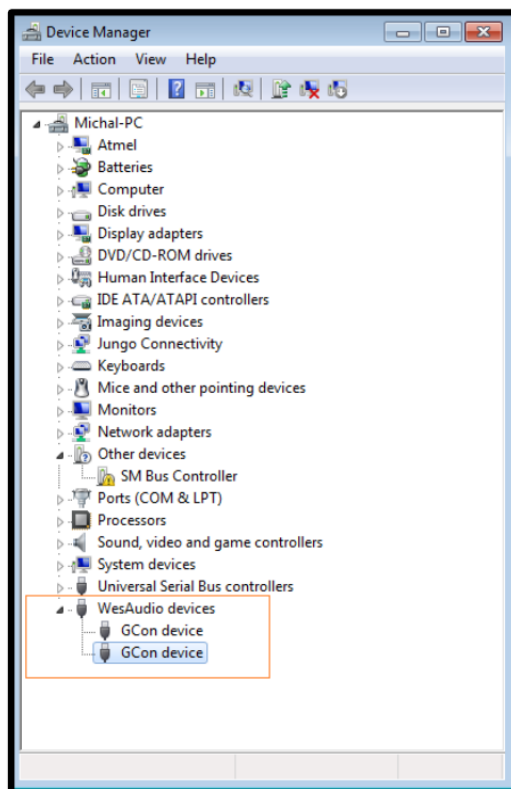
インストール中に問題が発生した場合は、support@umbrella-company.jp へお問い合わせください。

よくある問題と、原因の確認に役立つ対処方法を以下に示します。

- 問題：「Can't find my device in the plug-in dropdown menu」
(プラグインのドロップダウンメニューに自分の機器が表示されない)

○ 原因は複数考えられます。Windowsでは、USB機器がシステム上で正常に認識されているかを確認することが重要です。「Control Panel -> System -> Device Manager」で確認できます。

○ Windowsでの重要事項：ハードウェアとソフトウェアが通信するにはUSBドライバーのインストールが必要です。必要なのは初回インストール時だけで、以降のソフトウェア更新時はドライバーのインストール項目が自動的に無効になります。



4.2 GCon Manager

GCon Managerは、対応機器の構成を管理する多機能アプリケーションです。以下の場所にインストールされます。

- macOS：「/Applications/WesAudio/GConManager.app」から起動します。

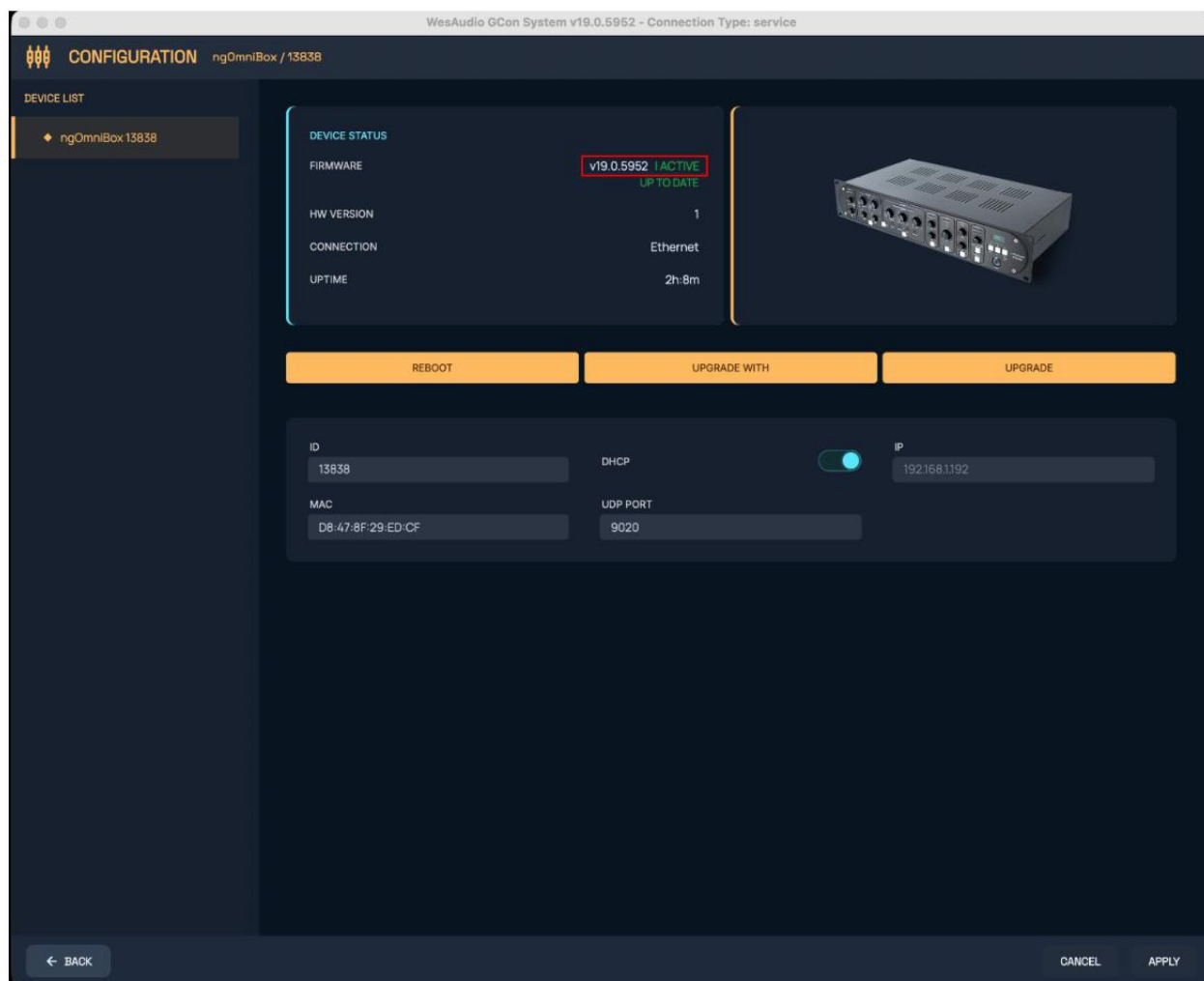
- Windows：インストール時に選んだフォルダーにあります。
通常の初期設定は「C:\Program Files (x86)\WesAudio\GConManager.exe」です。

主な機能

- **Firmware Updates**（ファームウェア更新）：機器のファームウェアを最新バージョンへ簡単に更新できます。
- **Configuration Settings**（構成設定）：IPアドレスなど、本体の設定を用途に合わせて変更できます。
- **Diagnostics**（診断）：診断テストで本体が正常に動作しているか確認できます。
- **External Controller Setup**（外部コントローラー設定）：ngLevelerなどの外部コントローラーを設定できます。
- **Standalone Operation**（スタンドアローン動作）：DAWを使わずに本体を直接制御できます。

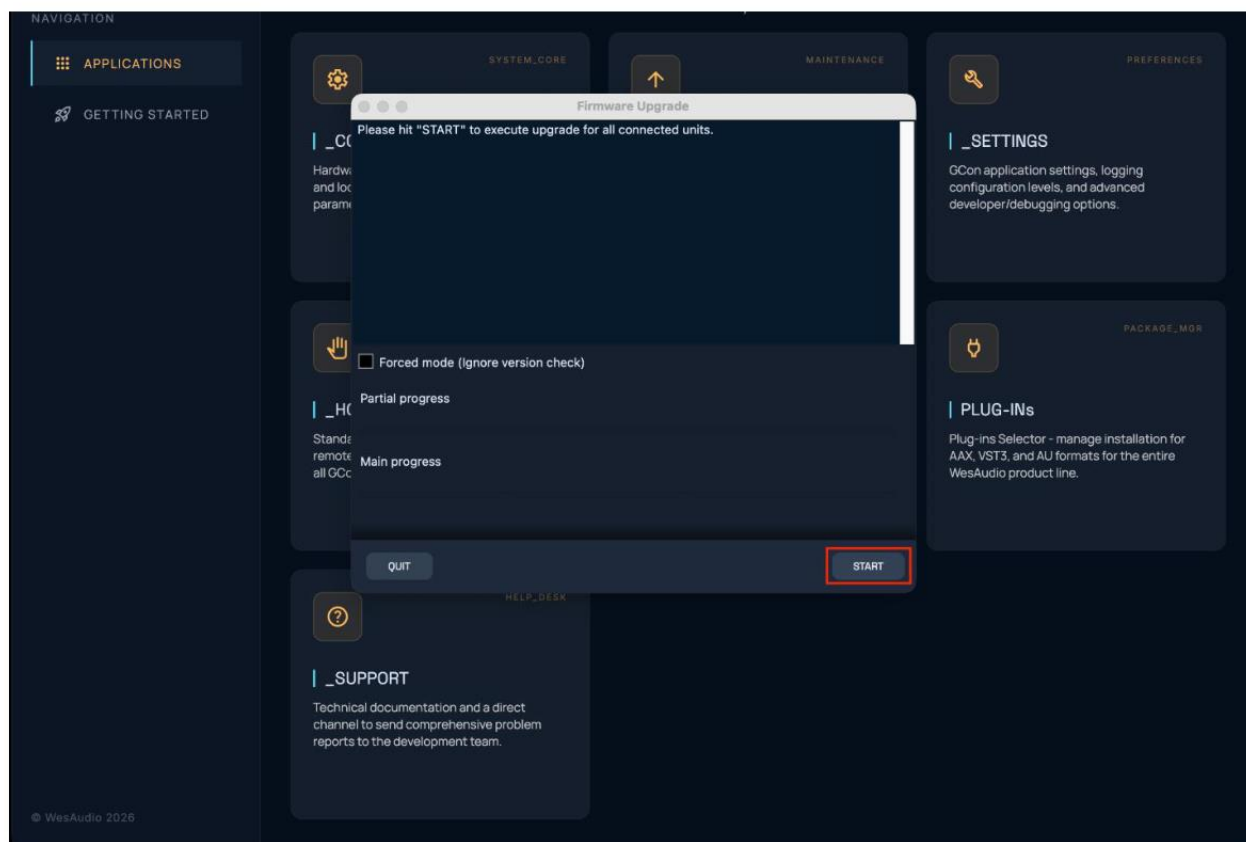
4.3 ファームウェアのバージョン確認

各機器は、ファームウェアのバージョンをワークステーションへ通知し、ホストアプリケーションと接続機器の互換性を確認します。バージョンの確認や更新には、GConManagerの_CONFIGアプリケーションを使用してください。また、本体起動直後のLCD画面にもバージョンが表示されます。



4.4 ファームウェアの更新

GConManagerのUPGRADEセクションを開き、「Start」を押します。ホストソフトウェアの最新バージョンに一致していないモジュールの更新が開始されます。



4.5 GCon 接続の設定

本章では、想定される接続構成と、設定に必要な主な手順を説明します。

音声信号はXLR端子で伝送します。USBとEthernetポートは、GConプロトコルによる本体設定の管理専用です。

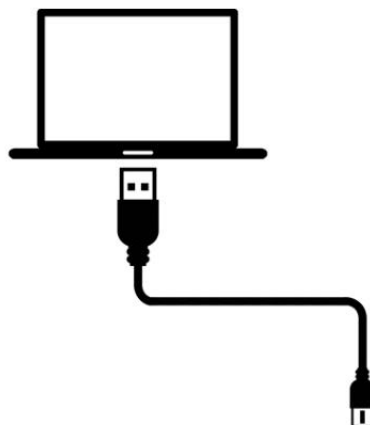
ngOmniBoxは、基本的に次の2種類の接続に対応しています。

- USB 2.0以上
- Ethernet 10/100：単一サブネット内のLANでUDPプロトコルを使用します。



4.5.1 USB

本体とワークステーションを直接接続するには、USBケーブルでngOmniBoxをコンピューターの空いている USB 2.0 以上のポートへ接続します。

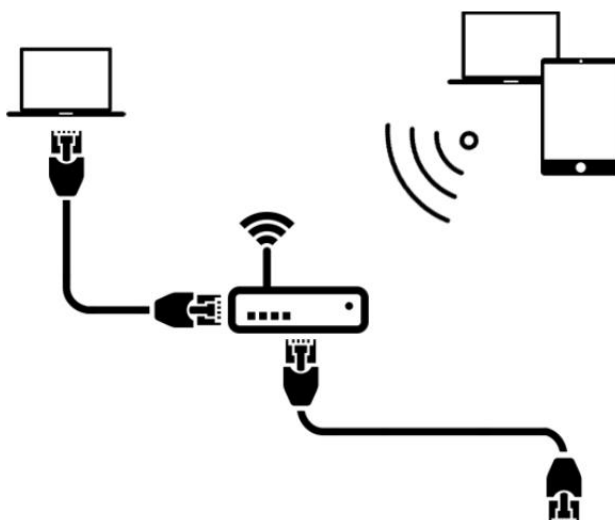


4.5.2 Ethernet

ngOmniBoxは、ほかのネットワーク対応機器と同様、以下の方法で柔軟にワークステーションへ接続できます。

- ローカルエリアネットワーク（LAN）接続：LANへ組み込むと、ネットワーク内のさまざまな機器からアクセスできます。スタジオ内の配置や使用方法の自由度が高まります。
- ワークステーションへの直接接続：ワークステーションへ直接つなぐ簡単な方法です。複雑なネットワークを使わない、1対1のシンプルな構成に適しています。

通信と動作を確実にするため、ワークステーションとngOmniBoxの両方にIPアドレスを手動設定する必要がある場合があります。以下は一般的なLAN構成の例で、複数の機器がngOmniBoxと通信し、その機能を利用する方法を示しています。



(*) 既存のネットワークへngOmniBoxを追加する場合、通常、ワークステーションには手動設定またはルーターのDHCPにより、すでにIPアドレスが設定されています。

4.5.3 DHCP による初期ネットワーク設定

各ngOmniBoxは、初期設定でDHCPを使用します。ルーターへ接続するだけで簡単に使用を開始できます。この設定を変更する場合は、以下の節を参照してください。機器に固定IPアドレスを設定するには、次の2つの手順が必要です。

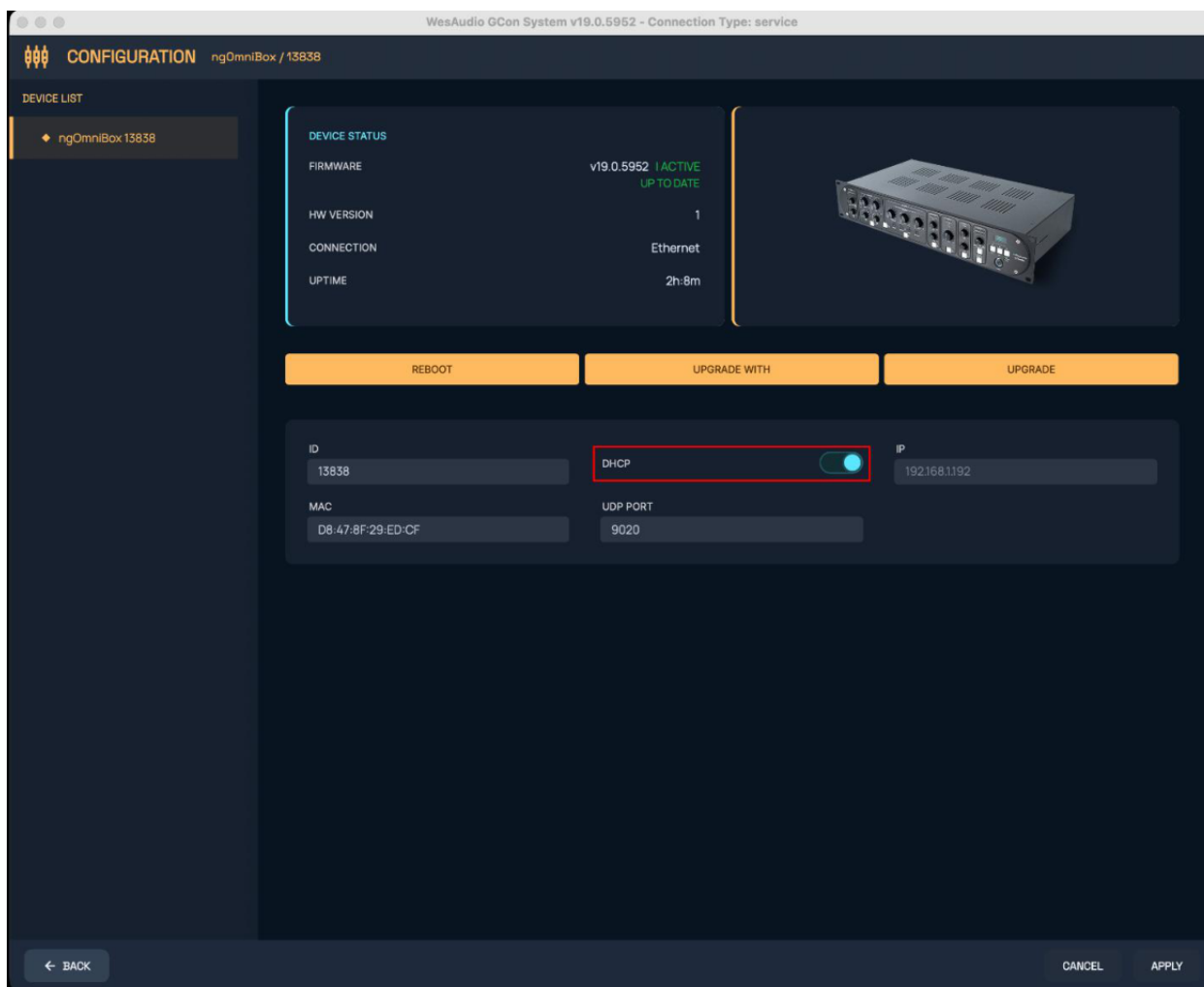
- DHCPを無効にする：ネットワークからのIPアドレス自動取得を停止し、固定IPアドレスを手動で設定できるようにします。
- 固定IPアドレスを設定する：DHCPを無効にした後、本体に特定の変更されないIPアドレスを割り当てます。

両方の詳しい手順を、次の節で説明します。

4.5.4 DHCPの有効化と無効化

ngOmniBoxのDHCP設定を有効または無効にするには、次の手順に従います。

- USB接続：まず、USBケーブルで本体とワークステーションを直接接続します。ネットワーク設定を変更すると接続が失われる可能性があるため、USB接続は再設定のための手段として重要です。
- GConManagerを起動：ソフトウェアを開き、_CONFIGアプリケーションへ進みます。
- 本体を選択：画面左側の要素ツリーから、お使いのngOmniBoxを選びます。
- DHCP設定を変更：自動IPアドレス割り当ての場合は「ON」、固定IPアドレスの場合は「OFF」にします。変更後、本体は再起動し、ngOmniBoxとの接続は自動的に再確立されるはずです。



USBからEthernetへ切り替える前に、本体へ適切なIPアドレスを設定することが重要です。これにより、機器とネットワークが円滑に通信できます。

次の節で、正しいIP設定の手順を説明します。

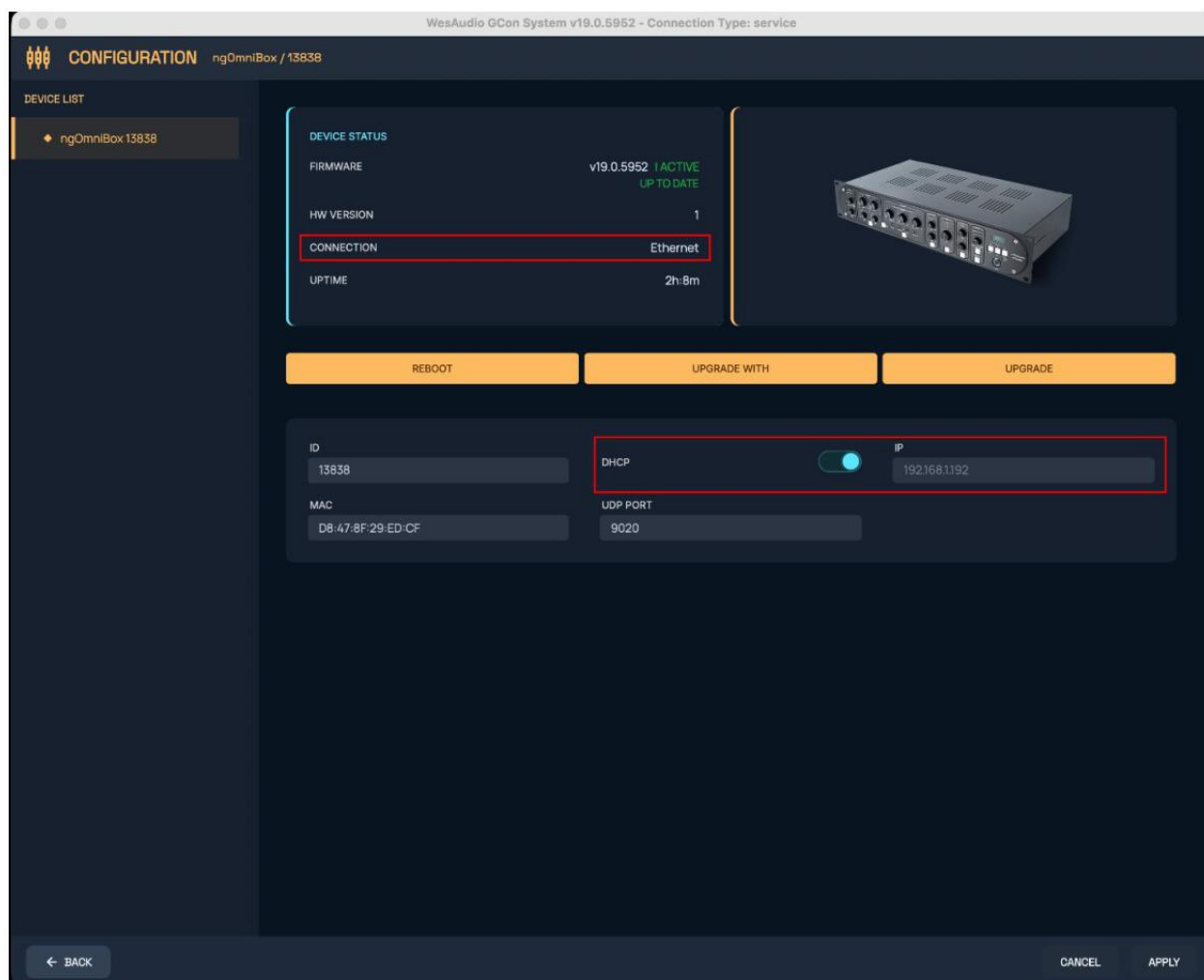
4.5.5 固定 IP アドレスの設定

次のような場合は、ngOmniBoxのIPアドレスを手動設定する必要があります。

- DHCP非対応ルーター：ネットワークへ接続できるよう、IPアドレスを手動設定します。
- 手動構成のLAN：ハードウェアスイッチなどを使って手動で構成したネットワークでは、その設定に合わせて本体のIPアドレスを手動設定する必要があります。
- ワークステーションへの直接接続：コンピュータのEthernetポートへ直接接続する場合も、正常に通信するためにIPアドレスの手動設定が必要です。

ngOmniBoxのIPアドレス設定は、ほかの機器と基本的に同じですが、本体固有の手順があります。以下のように設定します。

- USB接続：まず、USBケーブルで本体とワークステーションを直接接続します。Ethernetですでに接続され、設定へアクセスできる場合は、この手順は不要ことがあります。
- GConManagerを起動：コンピュータでソフトウェアを開き、「_CONFIG」へ進みます。
- 本体を選択：画面左側の機器一覧からngOmniBoxを選びます。
- DHCP設定を変更：「ON」の場合は「OFF」にします。本体の再起動が必要となり、その後、接続が自動的に再確立されるはずです。
- IPアドレスを設定：割り当てたいIPアドレスを欄に入力し、「Apply」を押します。新しいネットワーク設定を適用するため本体が再起動します。再起動後、新しいIP設定で接続が再確立されます。
- 設定が完了したら、本体のUSBケーブルを外し、Ethernetケーブルでネットワークへ接続します。新しく適用した設定で、ネットワーク経由の通信と制御が可能になります。



4.5.6 直接接続 PC/Mac の IP アドレス設定

EthernetでMacやPCへ直接接続する前に、4. 5. 4と4. 5. 5の手順に従い、USB経由で本体に固定IPアドレスを設定してください。Ethernet使用前にUSBケーブルを外します。コンピューターには同一サブネット内の別のIPアドレスを割り当て、以下の手順を行います。

MacとPCの共通手順

手順1 機器を準備する

- 標準的なEthernetケーブルを用意してください。
- 接続前にngOmniBoxの電源を切ってください。

手順2 Ethernetケーブルを接続する

- ケーブルの片側をngOmniBoxのEthernetポートへ接続します。
- もう片側をMacまたはPCのEthernetポートへ接続します。

Macの場合

手順3 ネットワークを設定する

- 「System Preferences > Network」を開きます。
- 左側の一覧でEthernet接続を選びます。未設定の場合、緑の点と「Connected」が表示された新しい接続として現れることがあります。
- 「Advanced」をクリックし、TCP/IPタブへ進みます。
- 必要に応じて、IPv4の設定を「Manually」または「Using DHCP with manual address」にします。

「Manually」の場合、本体と同一サブネット内の別のIPアドレスを入力します。
※2台に同じIPアドレスを割り当てないでください。

- 「OK」、続いて「Apply」をクリックして保存します。

PCの場合 Windows 10/11

手順3 ネットワークを設定する

- 「Settings > Network & Internet > Ethernet」を開きます。
- 使用するEthernet接続をクリックします。
- 下へスクロールし、「IP assignment」の「Edit」を選びます。
- 「Edit IP settings」のドロップダウンで「Manual」を選びます。
- 「IPv4」をオンにし、本体のネットワーク設定に合わせてIPアドレス、サブネットマスク、ゲートウェイを入力します。
- 完了したら「Save」をクリックします。

MacとPCの共通の最終手順

- ngOmniBoxの電源を入れます。
- Ethernet動作に必要なソフトウェアやドライバーが、コンピューターにインストールされていることを確認します。
- 必要に応じて、本体のネットワーク設定をコンピューターの構成に合わせます。IP競合を避けるため、同一サブネット内で、DHCPの割り当て範囲外の固定IPアドレスを本体に設定する場合があります。

これで、ルーターやネットワークスイッチを使わずに、Ethernetで本体とコンピューターを直接通信させ、機器の管理と制御を行えます。

5 デジタル制御とリコール

本章では、ngOmniBoxの管理と設定のオートメーションに利用できる各種機能を説明します。オートメーションの中心となるのは、一般的な形式に対応するプラグインを通じたDAWとの連携です。ハードウェアとデジタルソフトウェアのシームレスな統合により、創作の可能性が広がり、作業効率が高まります。

DAWプラグインによる制御

DAWプラグインによる制御はアナログとデジタルを結び付け、DAWから直接ハードウェアの設定を操作できるようにします。実機と仮想操作の融合は利便性を高めるだけでなく、プロデューサーやエンジニアと機器との関わり方を変えます。

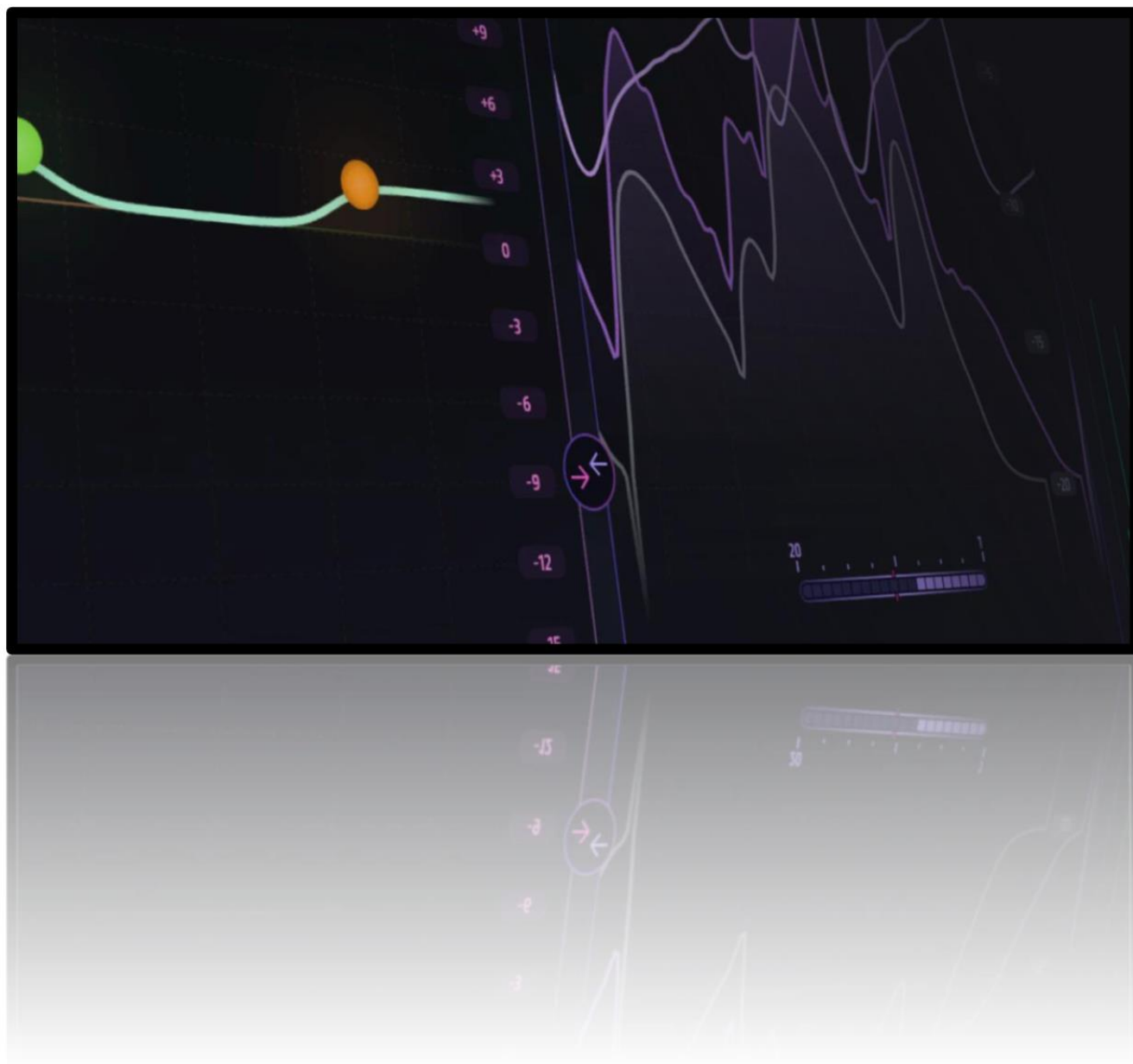
DAWプラグイン制御の利点

- 精度とリコール：セッションの設定を正確に復元できるため、本体を手動で再設定せずにミックスを再開・変更できます。複数のプロジェクトを扱う場合や、セッション間の一貫性を保ちたい場合に重要です。
- オートメーション：DAW内でngOmniBoxの全パラメーターを自動化できます。手動操作なしで時間に沿った動的な設定変更ができ、トラックに動きや躍動感を加えられます。
- 作業効率：特に複雑な構成では、本体の手動調整は手間がかかります。プラグインなら実機に触れずに設定変更やA/B比較をすばやく行え、制作を効率化できます。
- 創作の可能性：アナログの温かみと柔軟なデジタル制御により、リアルタイムの実験や、ハードウェア単独では難しい、あるいは実用的でない効果の実現が可能になります。
- アクセス性：本体に直接触れにくい配置やスペースの制約があっても、ワークステーションからすべての機能へアクセスし、調整できます。

ngOmniBoxのDAWプラグイン連携は、豊かなアナログ音質とデジタル制御の精度・多用途性を組み合わせます。本体の機能を拡張するとともに、音楽制作にこれまでにない制御性と柔軟性をもたらします。

5.1 DAW プラグイン

ngOmniBoxプラグインは、本体のすべてのパラメーターを制御し、DAW環境へシームレスに統合します。汎用性と使いやすさを考慮し、VST2、VST3、AU (Audio Units)、AAXなどの一般的なプラグイン規格に対応しているため、幅広いソフトウェアプラットフォームで使用できます。



5.1.1 ngOmniBox プラグイン管理パネル

Analog Sound Digital Recall



ngOmniBoxプラグインは、ハードウェアのレイアウトを再現するように設計されています。本体の操作に慣れた方にとって、なじみがあり直感的なインターフェースです。対応関係が明確なため、ハードウェアとソフトウェアを円滑に行き来でき、フロントパネルの機能に関する知識をそのままプラグインの操作に活かします。

各コントロールと機能の詳細は、「フロントパネルと主な機能」の章を参照してください。本体でのパラメーター調整にも、プラグインでの調整にも役立つ、操作方法の詳しい説明があります。

1. Undo : 直前の調整前の状態へ戻します。設定を恒久的に変更せずに、操作ミスの修正や変更内容の再検討をすばやく行えます。
2. Redo : Undoで取り消した最後の変更を再適用します。納得するまで調整を見直せるため、設定の自由度が高まります。
3. Previous Preset : プリセットデータベースから前のプリセットを読み込みます。
4. Next Preset : 次のプリセットを読み込みます。
5. Preset Selector : プリセットの選択、表示、削除を行います。
6. Scale : 画面サイズや好みに合わせてGUIの大きさを変更します (75%/100%/125%/150%/175%/200%)。
7. Preset Info : 現在読み込んでいるプリセットの詳細を表示します。
8. Preset Save : 現在のプリセットを保存します。
9. Preset Save As : 現在の設定を、名前と説明を付けた新しいプリセットとして保存します。
10. Menu :
 - Reset Parameters to Default : すべてのパラメーターを初期値へ戻します。
 - 現在インストールされているプラグインのバージョンを表示します。
11. Bypass : ハードウェアのバイパスを有効または無効にします。
12. Toggle Connection Button : 接続をON/OFFに切り替えます。「Select Connection Button」で接続IDを選択した場合だけ動作します。
13. Select Connection Button : GCon対応機器との接続を確立・管理します。制御する本体の識別と選択を簡単にし、プラグインと実機を円滑に連携させます。接続状態は次のように表示されます。
 - USB : USBで接続され、本体とワークステーションが直接通信しています。
 - ETH : Ethernetによるネットワーク接続です。より柔軟な構成に対応できます。
 - Connection ID : 接続本体の固有IDを表示し、複数台の識別・管理を容易にします。併せて、現在の接続状態を以下の表示で示します。
 1. ON : 白色の通常フォント。接続に成功し、プラグインと本体が通信中です。
 2. OFF : 灰色の通常フォント。接続が確立されておらず、切断または通信を妨げる問題があります。

3. Connecting : 灰色の斜体で、接続を確立している途中を示します。5秒を超えてこの状態が続く、接続できない場合は、トラブルシューティングまたはサポートへの相談が必要な可能性があります。

14. Copy : 現在のパラメーター状態をコピーします。

15. Paste : コピーしたパラメーター状態を貼り付け、設定をすばやく複製します。

16. Configuration Bank : それぞれ3つの構成を持つバンクを選択します。

セッションや曲の中で本体設定を切り替えるオートメーションに対応します。

17. Config A/B/C : 現在のバンク内の構成A、B、Cを選び、比較やリコールを行います。

18. Resize : インターフェースの表示サイズやレイアウトを調整します。

5.1.2 ngOmniBox プラグインの基本構成



ngOmniBoxプラグインは、対応する本体のアナログ機能を直接制御します。コントロールはハードウェアの信号経路と1対1で対応し、プラグインでのパラメーター変更がアナログ回路へ直接反映されます。

各プロセッシングブロックの動作と音の特性は、本書の「アナログプロセッシングブロック」で詳しく説明しています。

以下の節では、対応するプラグインのコントロール、配置、機能を説明します。

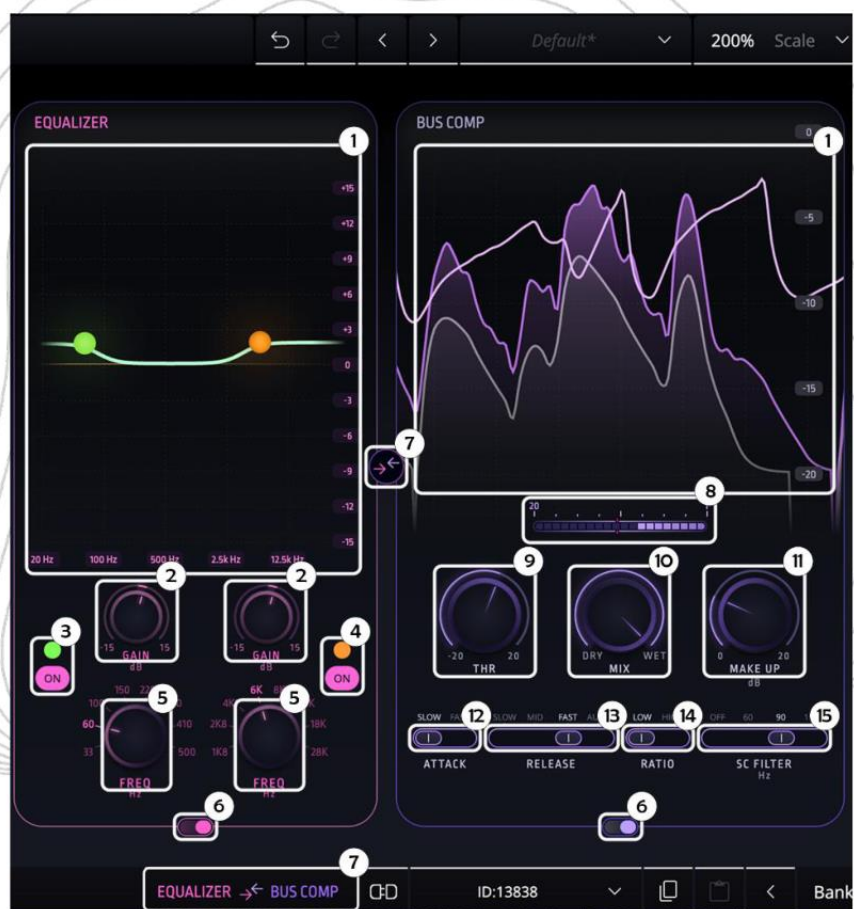
5.1.3 ngOmniBox プラグイン 入出力セクション

Analog Sound
Digital Recall

1. Input Meter : 入力信号レベルを表示します。
2. Input Insert : 入力インサートをオンまたはバイパスします。
3. Input/Output Trim : 対応する入力または出力信号のレベルを調整します。
4. HPF ON : 入力HPFをオンまたはバイパスします。
5. Input HPF : HPFのカットオフ周波数を調整します。
6. Output Meter : 出力信号レベルを表示します。
7. Output Insert / M/S : 出力インサートとStereo/M/S動作をコントロールします。

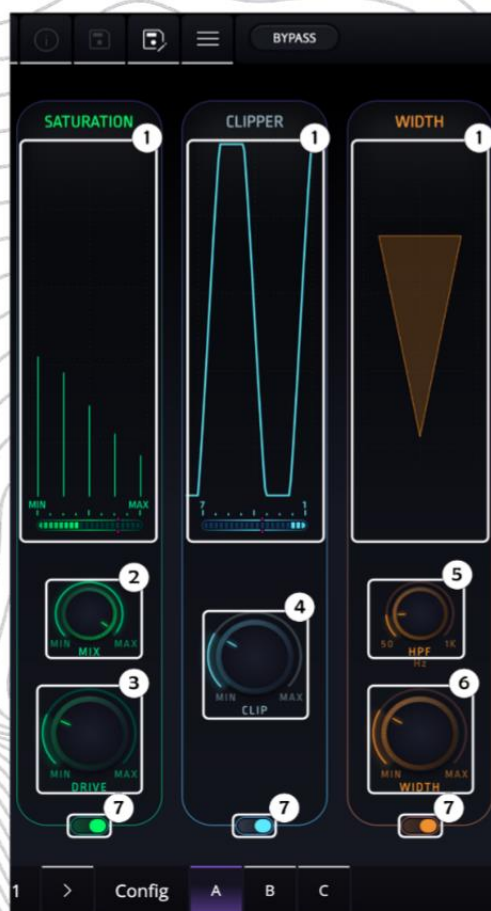
5.1.4 ngOmniBox プラグイン EQ とバスコンプレッサー

Analog Sound Digital Recall



1. Processing Graph : 有効な処理をリアルタイムで可視化します。EQでは周波数特性を、バスコンプレッサーではコンプレッサーのレスポンスとゲインリダクションを表示します。
2. GAIN : 選択したEQバンドのブースト／カット量を、-15 dB～+15 dBの範囲で0.25 dB単位で調整します。
3. LF ON : 低域シェルビングバンドをオンまたはバイパスします。
4. HF ON : 高域シェルビングバンドをオンまたはバイパスします。
5. FREQ : 対応するLF／HFシェルビングバンドの動作周波数を選びます。
6. IN : EQまたはバスコンプレッサー全体をオンまたはバイパスします。
7. EQ/Comp Flip : 信号経路内のEQとバスコンプレッサーの順序を変更します。
無効時はEQ → COMP、有効時はCOMP → EQです。素材と目的に応じ、EQとコンプレッションの相互作用を調整できます。
8. Gain Reduction Meter : バスコンプレッサーが現在適用しているゲインリダクション量を表示します。
9. THR : コンプレッサーのスレッシュホールドを設定し、コンプレッションが始まる信号レベルを決めます。
10. MIX : ドライ信号とコンプレッション信号をブレンドして、パラレルコンプレッションを行います。
11. MAKE UP : コンプレッサーによるレベル低下を補うため、コンプレッサーの出力ゲインを調整します。
12. ATTACK : アタック時間を選びます。SLOW : 30 ms、FAST : 0.1 ms。
13. RELEASE : リリースモードを選びます。
SLOW : 1.2 s、MID : 0.6 s、FAST : 100 ms、AUTO : 2つの時定数による自動リリース。
14. RATIO : コンプレッション・レシオを選びます。LOW : 1.5:1、HIGH : 10:1。
15. SC FILTER : サイドチェインHPFをOFF、60 Hz、90 Hz、150 Hzから選び、低域成分に対するコンプレッサーの感度を下げます。

5.1.5 ngOmniBox プラグイン サチュレーション/クリッパー/WIDTH

**Analog Sound
Digital Recall**

1. Meter / Visualization : 各セクションの処理状況を表示します。
SaturationとClipperではリアルタイムのプロセッシングメーターとして動作し、Widthでは選択したステレオ幅の設定を可視化します。
2. MIX : ドライ信号とサチュレーション処理済み信号を混ぜます。
3. DRIVE : 信号に加えるサチュレーションの量を制御します。
4. CLIP : アナログクリッピング効果の強さを制御します。
5. HPF : WidthセクションのSide信号に適用するHPFの周波数を設定します。
6. WIDTH : 信号のステレオ幅を制御します。
7. IN : 対応するSaturation、Clipper、Widthを有効化またはバイパスします。

6 その他の機能

ngOmniBoxには、主な機能に加えて、多用途性と使いやすさを高める機能があります。主要コントロールほど目立ちませんが、本体全体の機能と操作性に重要な役割を果たします。これらを理解することで、ngOmniBoxの能力を十分に活用し、ワークフローを最適化して、より良い音質を得られます。

6.1 内部メモリーの管理

ngOmniBoxは、さまざまな使用状況や要望に対応し、お好みの設定を効率的に保存・リコールできる、堅牢な内部メモリー管理機能を備えています。

パラメーターの保存とリコール

- A/B/Cプリセット：本体の内部メモリーへ直接保存される3種類の構成です。電源を入れ直した後も、すばやく呼び出せます。
- 100個の内部プリセット：クイックプリセットに加え、本体メニューから選べる100個の内部プリセットがあり、幅広い保存用途に対応します。
- 保存数に制限のないDAWプラグインプリセット：DAWプラグイン内で任意の数のプリセットを保存でき、プロジェクトごとの設定を柔軟に管理できます。

6.1.1 クイックプリセット A/B/C

クイックプリセットは、すばやい呼び出しを目的とした3つのメモリーバンクで、本体設定を簡単に比較できます。接続中のプラグインと同期し、ハードウェアとソフトウェア間の設定を一致させます。

6.1.2 内部プリセット

プラグインを使いにくい、または使えない場合のために、ユーザー設定用の100個のメモリースロットがあります。現在有効なクイックプリセット（A、B、C）へ読み込まれます。

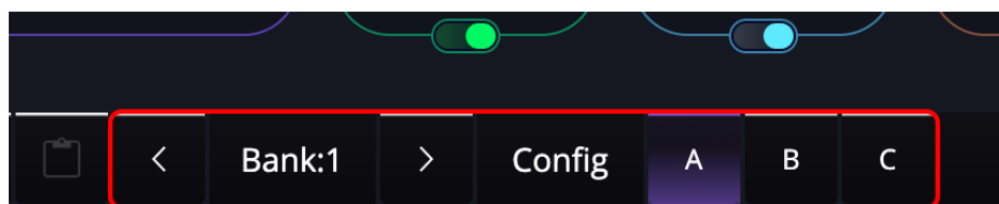
内部プリセットの選択と管理

- プリセットメニューを開く：INSERT MS（MENU）ボタンを2秒間長押しし、PRESET MENUへ入ります。バイパスボタンでプリセット1～100を選べます。
- プリセットを移動：WIDTH INで前へ、BYPASS ALLで次へ進みます。
- 読み込み：A（LOAD）を押し、選択したプリセットを現在のクイックプリセットへ読み込みます。
- メニューを終了：B（QUIT）またはINSERT MS（MENU）を押します。
- 保存：保存先番号を選んでC（SAVE）を押し、両チャンネルの現在の設定をその番号へ保存します。

この内部メモリー管理機能は、即座の呼び出しから詳細なプリセット選択・管理まで、複数の保存方法を提供します。ngOmniBoxの多用途性を高め、ミックスとマスタリングの作業を最適化します。

6.1.3 コンフィギュレーションバンク

Configuration Bank機能により、異なるパラメーター状態と追加のA/B/C構成を設定し、柔軟に使用できます。複数のメモリーバンクは、同じセッション内で複数曲をミックスする場合に特に便利です。Configuration BankパラメーターはDAWでオートメーションでき、セッション内の各部分や複数曲の間で異なる設定を維持できます。1つのセッションで複数曲を処理することが多いマスタリングで、特に役立つ機能です。



7 トラブルシューティング

- 音が出ない、または信号が途切れる
- 意図しない歪み
- ドンというノイズ、または低域の不要な音
- コンプレッションの動作が不安定
- DAWオートメーションに反応しない
- 過度の発熱

以上の問題が発生した場合は、WesAudioのFAQサイト <https://wesaudio.com/faq/> を参照してください。詳しい確認手順と解決方法を掲載しています。

8 略語と用語

GConは、アナログ機器の包括的な管理とリコールのために開発された高速通信プロトコルです。機器の制御・管理専用であり、音声信号は伝送しません。アナログの温かみとデジタルの利便性を結び付け、音質や制御の柔軟性を損なわずに、両方の利点を活用できるようにします。

